

4 学年次生に対する卒業時のアンケート集計結果のまとめ

- アンケート実施日:令和5年12月25日(看護総合の試験日)
- 学生数:97名
- 試験の待機時間中に Google フォームにて実施
- アンケート回収数(率):97名回収(100%)

I. 看護学部のカリキュラムおよびシラバスの構成について

カリキュラム評価に関する項目では、19項目中17項目で“そう思う”または“少しそう思う”の肯定的な回答が90%以上を占めていた。また、“そう思う”の回答が昨年度と比較して多く、全体的に評価が高い傾向にあった。一方で、“あまりそう思わない”“そう思わない”といった低い評価の回答が多かった項目は、「学生の個々の特色を伸ばす教育が提供されている」(13.4%)、「他学部との合同科目(IPE)の教育内容について満足している」(12.4%)であった。これは、昨年度と同様の項目であるが、評価は改善している。

II. 看護学部のディプロマ・ポリシー(学位授与方針)の達成状況について

ディプロマ・ポリシー各項目の達成状況の平均は、3.33~3.55であり、昨年度(3.01~3.36)から比較するとすべての項目で上昇している。ほとんどの項目で約5割の学生が“4点(達成できた)”と評価しており全体的に高い評価となっている。項目のなかでは「看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる」の達成度が最も高く、「看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」が最も低かった。これは、昨年度も同様の結果であった。

III. 看護学部での学生生活のサポートについて

サポートに関する項目では、18項目中10項目で“そう思う”または“少しそう思う”の肯定的な回答が90%以上を占めており、全体的に評価が高い傾向にあった。そのなかで、「図書館の学習環境は整っていた」(100.0%)、「科目担当者の学習支援体制は整っていた」(99.0%)、「実習室の学習環境は整っていた」(99.0%)は特に高い評価であった。評価の低かった項目(“そう思わない”または“あまりそう思わない”と回答した者が多かった項目)は、「国家試験対策は役立った」(30.9%)「e-ポートフォリオ(Mahara)は活用できた」(27.8%)、であり、昨年度と同様の項目であるが、評価は改善している。

IV. 看護学部での学生生活の満足度について

学生生活の満足度は、平均値が77.4%(昨年74.8%)、標準偏差が15.0(昨年15.3)であり、昨年度とほぼ横ばいである。満足度の高い理由には、カリキュラムや実習の充実、友人関係、充実した大学生活などが挙げられた。満足度の低い理由には、コロナ禍の制限に関することが多く挙げられた。その他には学費に関することが挙げられていた。

V. 看護学部でのカリキュラム、シラバスの構成に対する意見・要望(自由記載)

国家試験対策に関する講義を希望する声が数件挙げられていた。また、暗記ではなく論理的な思考を促す講義を望む意見も見られた。

VI. 看護学部での学生生活のサポートに対する意見・要望(自由記載)

学生ホールの環境(プリンターも含めて)に関して改善を望む意見が数件挙げられていた。その他には、国家試験対策、医心館の利用時間、アドバイザーに関しての要望が挙げられていた。

【見出された課題と今後の対応策】

カリキュラムおよびシラバスの構成については、「学生の個々の特色を伸ばす教育が提供されている」の評価が低かった。教養ゼミナールや卒業研究などのゼミ形式の授業は、少人数であるため個々の学生の特色を捉えやすい。そのため、少人数のグループで展開される授業や実習において、個性を伸ばす教育の工夫が必要であると考えられた。一方で、ゼミ形式のみならず、その他の講義でも個々の特色を伸ばす方法を模索していく必要性も考えられ、次年度以降のアンケートなどで個々の特色を伸ばす方法に関する項目を追加するなどして、詳細を検討していく。例年評価が低い傾向にある「国際的保健・医療活動に目を向ける教育内容について満足している」の項目は、改善が見られた。COVID-19による活動制限が緩和され、国際交流の機会が増えつつあることも要因として考えられる。今後も国際看護学等の科目に限らず、各科目においても国外の保健・医療活動に関する内容を取り入れ、国際性に目を向けていく必要があると考える。

ディプロマ・ポリシーの達成状況について、昨年度と比較すると全体的に評価が高い傾向にあった。この先に行われる卒業アンケートや就職先に対する調査も含めて検討が必要であると考ええる。各項目の評価が高いなかで、最も評価の平均が低かったのは、「看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」の項目である。引き続き、教養ゼミナールや卒業研究などを通じて、学生の科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的な思考の強化に繋げていく必要がある。また、自由記述のなかで論理的な学修を望む声もあるように、各科目においても形態機能・病態・看護を関連付けながら、暗記ではなく論理的な思考を促す教授方法の強化が必要と考えられる。

学生生活のサポートについて、「国家試験対策は役立った」の評価が低かった。国家試験対策については、自由記述でも肯定的な意見・改善を望む意見、多くの記述が見られており、学生がサポートに大きな関心を持つ項目であると考ええる。その他の結果も含めて学生委員会との情報共有が必要であると考ええる。

学生生活の満足度の平均は、77.4%であり例年とほぼ同様である。満足度の理由にはコロナ禍の制限に関することが多く挙げられており、COVID-19が学生生活に大きな影響を及ぼしていたと考える。制限が徐々に緩和されてきており、講義や実習、サークル活動、大学行事などが通常通り実施できるようになってきており、今後COVID-19による影響は減ってくると考える。満足度の高い

理由には、例年交友関係に関することが多く挙がるが、今年度は学習面(指導・環境)、実習に関する肯定的な意見も多く挙げられていた。そんななか、自由記述では勉強場所、プリンター、実習室に関する学習環境への意見、もっと技術練習をしたいといった要望が聞かれた。学習環境は、学生生活の満足度に大きく影響している点でもあり、自主学習のために教室を開放することや実習室での自主練習の環境を更に整えていくことなどが、さらなる満足度の上昇に繋がると考えられる。

今年度も看護総合の日程に合わせてアンケートを行ったため、すべての学生からアンケートを回収することができ、より多くの学生の意見を聞くことができた。しかし、保健師選択コースの質問に受講者以上の回答があったことから、正確な結果が得られていない部分がある。次年度以降、項目の文言や事前説明の内容について検討が必要である。

本調査の結果から考えられる今後の課題は、以下の通りである。

1. 自主学習のための教室開放や実習室での自主練習環境の更なる整備など、学生の学修環境の充実を検討していく。
2. 教養ゼミナールや卒業研究だけでなく、各講義科目においても学生の科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的な思考の強化に繋げる。
3. 個々の学生の特色を伸ばす教育に配慮できるように、今後その方法を模索していく。